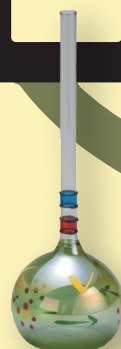


第6回 教育展

楽器の 世界



—子どもと音楽をつなぐ楽器展—



〈表紙の画像〉右上から右回り

- ・チリンバ(カリンバ)
- ・水笛
- ・ぼっぺん(緑)
- ・スリットドラム
- ・ぼっぺん(青)
- ・アコーディオン
- ・透明鍵盤ハーモニカ
- ・ゴピチョンド
- ・でんでん太鼓

【凡 例】

- ・本冊子は、2024(令和6)年 11 月 1 日(金)～12 月 23 日(月)まで、京都教育大学附属図書館にて開催する、第 6 回教育展「楽器の世界：子どもと音楽をつなぐ楽器展」の解説付き図版目録である。
- ・本企画展は京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアムが主催し、同大附属図書館が共催する。
- ・解説の執筆は、樫下達也(音楽科准教授、教育資料館運営委員会委員)、中村翼(社会科学科准教授、教育資料館次長)、増田真結(音楽科准教授)が行った。各文責は()内に示した。

—子どもと音楽をつなぐ楽器展—



第6回教育展 「楽器の世界：子どもと音楽をつなぐ楽器展」に寄せて

谷口 匡（京都教育大学教育資料館長）

第6回教育展として「楽器の世界：子どもと音楽をつなぐ楽器展」を開催いたします。

音楽と楽器に深いつながりがあることは今さらいうまでもありません。ちなみに音楽の「楽」の字形が何に由来するかをご存知でしょうか。

さまざまな説がありますが、旧字体の「樂」から少し想像できるように、楽器を表しているとする説が見られ、たとえば『角川新字源』では、木に糸（幺）を張った弦楽器にかたどる象形文字としています。こう考えるとたいていの漢和辞典でこの字を「木」の部首に分類していることも理解できますね。

ついでながら、このように「楽」の字源は楽器そのものを指しましたが、そこから音楽、さらに転じて楽しいという字義が付加されました。つまり楽器を演奏するのは音楽、音楽は楽しい、と意味がつながりながら広がったのです。

この夏、京都新祝祭管弦楽団の定期演奏会を聴く機会があり、ドヴォルザークのチェロ協奏曲など、まさに「楽器の世界」を堪能しました。なかでも特別企画で演奏された尺八・チェロ・ピアノのアンサンブルがすばらしく、とりわけ初めて生で聴いた尺八の音色は迫力のあるもので、たちまち魅了されました。

今回の教育展ではそうしたオーケストラにおける楽器というよりは、サブテーマに「子どもと音楽をつなぐ楽器」とあるように、本学が教育大学であることにちなんで、教育のために開発された楽器や、子どもの遊びの中で使用される楽器をとり上げます。懐かしいでんでん太鼓や足踏み式オルガンなどが展示されるほか、日本のものにとどまらず、世界のさまざまな玩具的楽器と教育的楽器も紹介されます。実物の楽器をぜひご覧いただきたいと思います。さらには展示以外にも、楽器についてさらに理解を深められるようワークショップや講演会も企画しています。

私のささやかな体験では、小学校の時、『おもちゃの交響曲』を学年全体で合奏したことがあります。その他大勢のリコーダーなどではなく、どうしたはずみか水笛に抜擢？され、大いに張り切った記憶があります。けっして音楽は得意教科ではなかったのですが、この時の楽器の演奏は今でも忘れられない大切な思い出です。

このたびの「楽器の世界」展にも、ぜひ多くの皆様にご来場いただき、改めて楽器の楽しさを思い起こし、学校教育に音楽があることの意味を考える機会にいただければと願っています。

最後になりましたが、この教育展のためにご尽力いただいた関係各位に心より感謝いたします。



はじめに

音楽とは人間によって組織づけられた音響のことであり(ブラッキング 1978 [1973])、この意味において音楽は世界中のどこにでも観察される人間の文化的営みといえます。

では人は音響すなわち音を組織するとき、どのようにしてそれを鳴らすのでしょうか。ひとつには自身の身体を用いて鳴らす方法が考えられます。声、手拍子、足踏みなどです。もう一つはモノを使う方法でしょう。原始的には丸太を打つ、石と石を打つ、植物の管に息を吹き込むなどが考えられます。音楽をするときに使うこれらさまざまなモノは、それぞれの文化の好みに合わせた音が鳴るように加工されることもあるでしょう。より大きな音、より心地よい音、幅広い音域をめざして…。いうまでもなく、音楽をする(=音響を組織づける)ために使われるこれらのモノは全て「楽器」と呼べるでしょう。

本展では、「楽器」のなかでも、「子どもと音楽をつなぐ楽器」という視点でこれを見てみたいと考えました。本資料館にも多数の楽器が収蔵されていますが、教育大学の附属施設であることを反映し、教育のために開発された楽器(教育用楽器)や子どもたちの遊びのなかで使用されるような楽器(玩具的楽器)も少なくないからです。音が鳴るモノとしての楽器は、子どもと音楽をつなげる「遊び」や「教育」の場ではどのようなカタチを取るのでしょうか。世界のさまざまな玩具的楽器や教育用楽器に光を当てることで、その問いへの答えの一端に迫りたいと考えています。

まず、楽器分類学の方法に沿って世界の玩具的楽器を紹介します。続いて、日本や世界の教育用楽器を取り上げ、教育という営みのなかで楽器に与えられた様々な機能を紹介することで、音楽を教えることの意味を問い直す機会としたいと考えています。

「子どもと音楽をつなぐ楽器」という小さなテーマを入口とし、「楽器の世界」という深く広大な世界をぜひご堪能ください。

なお、本パンフレットの作成にあたり、様々な方のご協力をいただきました。まず、解説文の執筆にあたっては、とくに第1章の楽器分類の解説に対して、国立民族学博物館／総合研究大学院大学准教授の岡田恵美氏から多大なご指導を賜りました。ただし、本文中に誤りがあるとすれば、その責任は全て執筆者にあります。また第1章には大阪市立科学館学芸員の上羽貴大氏から「楽器と科学」の視点で語るコラムをお寄せいただきました。お二人にこころよりお礼申し上げます。(檜下)

第1部 玩具的楽器と楽器分類

第1部では楽器の世界への入り口として「楽器の分類」に焦点を当てます。

古来、中国においては石、金、竹、木、土、革などの「素材」で八つに楽器を分類したと言われますが、身近な楽器を思い浮かべてみてもわかるように、それぞれの楽器が一つの素材からできていることは稀であるため、この分類には限界があります。また西洋においては16世紀ごろ以降、管楽器(吹奏楽器)、弦楽器、打楽器の三つに分類されてきたとされています。現在でも世間一般ではこの分類法に基づく分類が広く見られます。例えば小学校や中学校で使う音楽教科書においても、先の分類のうち管楽器(吹奏楽器)を二つに分けるかたちで、木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器という分類を使い、オーケストラ楽器が紹介されています。しかしよく見てみればわかるように、この分類法は、何でできているか(金管楽器の金属、木管楽器の木)やどんな形をしているか(管楽器の管)、何が音を出しているのか(弦楽器の弦)、どのように音を出しているのか(打楽器の「打つ」)という異なる基準によって楽器を分類しており、学術的な分類とはいえないことが指摘されてきました。

19世紀以降、博物館における楽器資料整理の必要性から楽器の分類法が試行錯誤されました。ブリュッセル楽器博物館のV.C. マイヨンは、インドの古代演劇理論書『ナーティヤ・シャーストラ』の中に書かれた発音原理による楽器分類から着想を得て、19世紀末に発音体によって4種類に区分する楽器分類法を提案しました。このマイヨンの四綱楽器分類法を1914年に改訂したものが、現在世界で最も広く使用されているホルンボステル＝ザックス法(以下、HS法)です。この分類は、楽器をまずは発音体の有無やその形状によって大別し、それぞれをさらに奏法や形状で細かく分類していくものです。すなわち、発音体に着目して体鳴楽器、膜鳴楽器、弦鳴楽器、気鳴楽器の四つに分けて、そのなかをさらに奏法や形状などに着目して仲間分けしていきます。そして後に、第五の楽器である電鳴楽器が加わり、五綱楽器分類法になりました。

第1部ではこのHS法に基づき世界の玩具的楽器を展示していきます。HS法の解説には柘植元一・塚田健一『はじめての世界音楽：諸民族の伝統音楽からポップスまで』に収録されている「楽器(音具)分類表」を参照しました。ただし、この5分類をさらに下の階層で分類する方法は諸説あり、楽器学関係の文献でも統一されていないようです。この点については各節において概説することになります。また「玩具的」とは何か、という点については様々な考え方があり得ますが、ここでは「操作・奏法が簡易で子どもでも容易に扱えるもの、あるいは子どもの遊びの場面でも使用されうるもの」と広く定義して「玩具的楽器」を選定しました。(柘下)

1-1. 体鳴楽器

体鳴楽器は「弦を張ったりドラムの皮を張ったりする場合におけるような張力を何ら必要と」せず、「天然の発音物質」でできている楽器です(ザックス 1966[1940])。かつては自鳴楽器とも呼ばれ、いわゆる打楽器全般のうち、太鼓類を除くものはここに分類されます。HS法では、これをさらに次のように分類します。(1) 打奏体鳴楽器、(2) 撥奏体鳴楽器、(3) 擦奏体鳴楽器、(4) 気奏体鳴楽器。例えば、本展で見る「チリンバ(カリンバ)」は撥奏体鳴楽器、「ぼっぺん」は気奏体鳴楽器ということになります。(柘下)

1-1-1. チリンバ(カリンバ)

【使用国:タンザニア 体鳴楽器】



チリンバは木の箱やひょうたんの胴に複数の金属片や竹片をとりつけた楽器です。この発音体を親指や人さし指で弾いて演奏します。このような楽器はサハラ以南のアフリカに広く分布すると言われます。ゴンゴマ(ギニア)、リケンベ(コンゴ)、サンジ(コンゴ)、デングー(ボツワナ)、ムビラ(ジンバブエ)、カリンバ(ザンビア)など、地域によって名称が異なります。ヨーロッパ人はこの種類の楽器をまとめて「ラメラフォーン」と名付けました。「親指ピアノ」(Thumb piano)の名称でも知られ、日本ではまとめて「カリンバ」の名称で親しまれています。儀式などのときに演奏するほか、持ち運びしやすいので、遠くへ出かけるときに、歩きながら演奏することもあるそうです(若林2003)。(檜下)

1-1-2a. ぼっぺん(左)

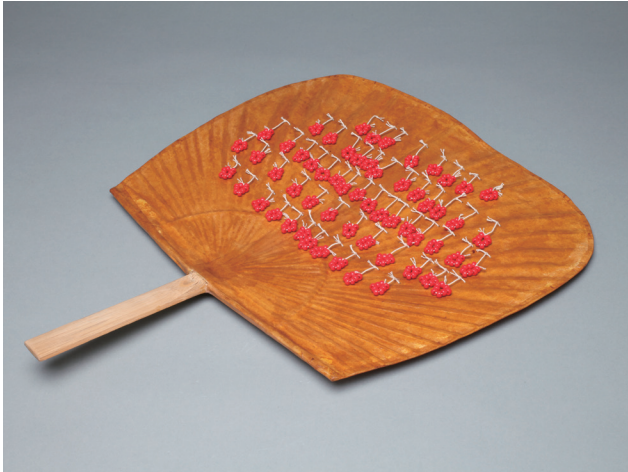
【使用国:日本(長崎県) 体鳴楽器】

1-1-2b. ぼっぺん(右)

【使用国:日本 体鳴楽器】

ぼっぺんは細いガラスの筒から息を吸い込み、口を離すと、球形部分の底のガラス面が振動してペコンと音を出す玩具です。明治20年代から30年代にかけて関東や京阪神で大流行した記録もあります(茂手木1998)。現在は長崎県を中心に土産物として販売されています。(檜下)





1-1-3. 雨団扇

【使用国：日本 体鳴楽器】

歌舞伎で雨音を表現するときに使用される楽器です。歌舞伎では雨音の表現として太鼓を用いることが多く、その場合は長く細いバチで「ボロボロン、ボロボロン」とまばらに雨が降りかかるような音を出します。雨団扇は、片面に糸で吊り下げた小豆を何列かつけて音を鳴らすものですが、現在は小豆がビーズに取って代わられています。本館の収蔵品もビーズがいくつかまとめられたものが短い糸で吊り下げられています(茂手木 1998)。(檜下)

1-1-4. カウベル

【使用国：ブルガリア 体鳴楽器】

カウベルは、元来はアルプスなどの山岳地帯に遊牧する牛が首につけているベルのことです。これを楽器用に改良したものがラテンアメリカの音楽の隆興とともに広まりました(網代景介・岡田知之 1981)。日本でも後者が教育用打楽器の一つとして学校教育の現場に広く浸透しています。(檜下)



1-2. 膜鳴楽器

膜鳴楽器は、膜状の振動体を振幅させて発音する楽器です。その多くはいわゆる太鼓で、HS 法では、打奏膜鳴楽器と呼びます。打奏膜鳴楽器はさらに直接打つもの(直接打奏)と、振ることで間接的に打つもの(間接打奏)に分けられます。和太鼓やティンパニのように、私たちがまず「太鼓」としてイメージする楽器は、この打奏膜鳴楽器のなかの「直接打奏」ということになります。一方、本展で見る「でんでん太鼓」は「間接打奏」の楽器です。(檜下)



1-2-1. でんでん太鼓

【使用国: 日本 膜鳴楽器】

「豆太鼓」とも呼ばれ、奈良時代に中国大陸から舞楽とともに伝わった振鼓を起源としています。柄を持って回転させると側面についた球が皮を打って音が出ます。かつては子守が子どもをあやすときに手にしていた楽器でもあります(茂手木 1998)。(檜下)

1-2-2. ダマル

【使用国: インド 膜鳴楽器】

砂時計の形をした北インドの太鼓です。胴の中央に1〜2本の紐がついており、その先端には結び目や小さな玉がついています。腕をひねるようにして楽器を振ると、紐の先端のそれが砂時計型の底の膜にあたって音が鳴ります。いわば「柄のないでんでん太鼓」です。元来は宗教的な楽器でしたが、今日ではインドの托鉢僧や大道芸人などが用いるといいます(網代・岡田 1981)。(檜下)



1-3. 弦鳴楽器

弦鳴楽器は、弦状の振動体を振幅させて発音する楽器です。これらの楽器はその標準的奏法に注目して擦弦楽器、打弦楽器、撥弦楽器に分けることができますが、HS 法では、まず楽器の形状に着目して(1)単一弦鳴楽器、(2)複合弦鳴楽器に分けます。(1)単一弦鳴楽器は、ネックのようなものをもたず「単一の胴体」からできているもので、何本かの弦が胴の端から端まで張られています。これはさらに棒状、筒状、平板など形状で細分化され、例えば箏は筒状、ピアノは平板の単一弦鳴楽器ということになります。(2)複合弦鳴楽器は、胴やネックなど複数の部分から「胴体」が作られているもので、さらにその形状から「リュート」「ハープ」「ハープ・リュート」に細分化されます。「リュート」属はギターやヴァイオリン、胡弓などがこれにあたります。「ハープ」は弦の並んでいる面が響板に対して平行ではなく垂直になっているもので、オーケストラ楽器のハープがその典型的な形状です。「ハープ・リュート」は文字通り「ハープ」と「リュート」の両方の要素を併せもつ形状のもので、西アフリカのコラという楽器がこれにあたります。(檜下)



1-3-1. ゴピチョンド

【使用国：東インド 弦鳴楽器、膜鳴楽器】

木製の筒（ヤシの実の場合もある）の底に皮を張り、その皮の真ん中に1本の弦が接続されています。筒の約4倍の長さの竹をふたまたにして筒の両側に取り付け、竹の先端に弦の反対側を取り付けて張力をあたえます。ふたまたの竹を片手で握り、もう片方の手の指で弦を弾いて演奏します。竹の弾性を利用して弦の張力を変化させることで音の高さを変えることができます（網代・岡田1981）。この構造上の特徴から、膜鳴楽器として紹介されている場合もあります。構造が簡単なので、日本では子どもの楽器工作などで作られることもあります。（檜下）

1-3-2a. ぶんぶんぜみ(写真右)

【使用国:日本 弦鳴楽器】

1-3-2b. マンドウック(写真左)

【使用国:インド 弦鳴楽器】

筒の両端に油紙を張り、片方の紙の真ん中から糸を通して竹の棒に縛りつけてぐるぐる回転させることで唸るような音が出る楽器です。棒の先端に松脂をつけることで回転に伴い摩擦が生じて発音し、竹筒の共鳴胴に響く仕組みです。この仕組みから茂手木(1998)はこれを弦楽器の一種であると紹介しています。本展でもこれに倣って弦鳴楽器としました。日本ではこの楽器の音を蟬の声として聞きなし、蟬の形に加工されます。インドではカエルの声として聞きなしたようで、ヒンディー語でカエルを意味する「マンドウック」と名づけ、カエル型に加工したものが知られています。(檜下)



1-3-3. ヴァイオリン(1/16サイズ)

【弦鳴楽器】



ヴァイオリンは言わずと知れたヨーロッパを代表する弦鳴楽器であり、世界中で演奏されています。日本では鈴木鎮一が、幼少期からこの楽器の演奏を習得させる音楽教育法「スズキ・メソッド」を確立したことがよく知られています。本展示品も、「スズキ・メソッド」によるヴァイオリンのレッスンを受けた個人が2歳から3歳にかけて使用したもので、一番小さい 1/16 サイズ(大人用の楽器=フルサイズの 1/16 の大きさ)です。子どもの成長に合わせて、1/8、1/4、1/2、3/4 と様々なサイズの「分数ヴァイオリン」が作られています。玩具的楽器、というよりは、子どものサイズに合わせて楽器そのもののサイズを小さくした、まさに「教育用楽器」と呼ぶべきものだといえます。(檜下)

【コラム】 弦を弓でこするとどうして音が鳴るの

上羽貴大 (大阪市立科学館 学芸員)

楽器は、ふるえることで音を出します。演奏する人が、楽器にはたらきかけ、楽器をふるわせて、音を出しているのです。その方法、つまり奏法は、楽器によってさまざまです。太鼓やギターといった楽器であれば、張られた皮を叩いたり、弦をはじいたりというはたらきかけが、楽器のふるえを引き起こしているのは、すぐにわかります。一方で、楽器へのはたらきかけがどのようにふるえを引き起こしているのかが、直感的にわかりづらいものもあります。弓で弦をこすって音を鳴らす、バイオリンなどの「擦弦楽器」は、そのひとつではないでしょうか。

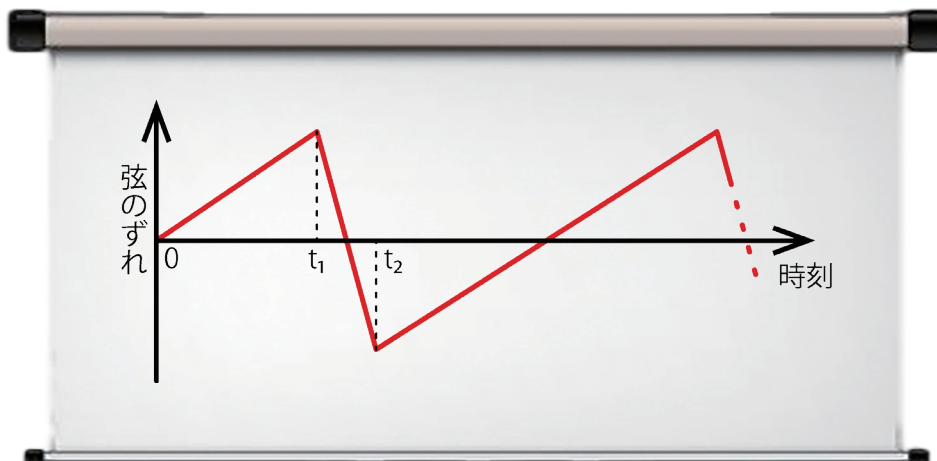
筆者がはじめて擦弦楽器に出合ったのは高校のときで、それは吹奏楽部のコントラバスという大きな擦弦楽器でした。テレビなどで見たことはありましたが、馬の毛を張った弓で弦をこするとどうして音が鳴るのか、演奏よりもそのしくみの方が気になり、手品を見るような気持ちでいたのを思い出します。

弓が弦をふるわせる手品のタネは、弓の毛に塗る松脂です。細かな松脂の粉末が、弓の毛と弦の間の摩擦によって瞬間的に温まることで、弦が弓にペタペタと粘着するようになります。この粘着で弦が動く弓に引きずられては離れて、をくりかえすことで、弦のふるえが起こります。この様子を以下でもう少し詳しく見てみましょう。

弦の上に弓をそっと置き、弓を一定の速度で一方向に動かすことを考えます。下のグラフは、弓に当たっている部分の弦の、元の位置からのずれを、時間ごとにあらわしたものです。

時刻 0 から、弓を動かし始めます。すると松脂による摩擦で弦は弓に引きずられ、元の位置からずれていきます(時刻 0 ～ t_1)。しかし、どこまでもいけるわけではありません。弦の両端は固定されているので、元の位置からずれていくほど、弦には元の位置に戻ろうとする力がかかるのです。ある程度まで引きずられ、松脂の摩擦よりも弦のずれを戻そうとする力が上回ったところで、弦は弓毛から外れ、弓の向きとは反対向きにスリップしていきます(時刻 t_1 ～ t_2)。ある程度まで戻ったところで、弦はふたたび弓毛にくっつき、ふたたび弓毛に引きずられていきます。そして弦は弓毛から外れ…この繰り返りで、弦のふるえがつくられます。くっついて(スティック)は外れてスリップしを繰り返すこの動きは「スティックスリップ現象」とよばれます。

スティックスリップ現象は、擦弦楽器だけでなく、摩擦によって鳴らすさまざまな楽器の音が鳴るしくみでもあります。ワイングラスの縁をぬらした指でこすって鳴らす「グラスハープ」がそのひとつです。指の皮膚がガラスの摩擦でずれていき、スリップするという繰り返しがガラスをふるわせ、音になります。指をぬらすのは、スリップが起こりやすいようにする潤滑剤としてはたらいていると思われます。



1-4. 気鳴楽器

気鳴楽器は、空気そのものが振動することで発音体となる楽器です。ザックス (1966[1940]) によれば、これらは一般的に「管楽器」と呼ばれているものと「自由気鳴楽器」と呼ばれるものに分かれます。「管楽器」は音高が管内の空気柱によって決定され、「トランペットとホルン」「笛、リード管楽器」「フルート」に分類されます。「自由気鳴楽器」は管内の空気柱が存在せず、発音体が空気に直接働きかけます。アコーディオンや鍵盤ハーモニカのリードが、この空気に直接働きかける発音体、ということになります。

一方、ヴァンターニッツ(1977)『楽器の歴史』では、「ニコラス・ベサラボフの提唱」以来、「フルー吹奏楽器」「リード振動楽器」「唇振動楽器」の三つに分けられている、と紹介されています。フルー吹奏楽器とはフルートやリコーダーのような気流そのものを発音体とする楽器です。リード振動楽器は、サックスやクラリネット、オーボエのようなリード管楽器と、アコーディオンのようなリードによる「自由気鳴楽器」も含まれます。唇振動楽器はザックスの「トランペットとホルン」の分類と対応しており、マウス・ホールに唇を押し当てて唇を震わせることで空気を振動させる楽器です。日本の法螺貝などもここに入れることができるでしょう。

本章で展示する気鳴楽器はいずれもザックスによるところの「フルート」、ヴァンターニッツが紹介するところの「フルー吹奏楽器」に属するものです。(檜下)



1-4-1a. 鳥笛(上)

【使用国:中国 気鳴楽器】



1-4-1b. 水鳥(下)

【使用国:不明 気鳴楽器】

鳥の形をした笛は世界各国に見られ、日本では子どもの「咽喉詰り除け」のまじないとして作られたり、「乳幼児の虫封じに利く」という俗信があったりと、厄除けや虫封じのための玩具であったとされます。水鳥は中に水を入れて吹く楽器で、吹くとヒョロヒョロと鳴き、同じものでも水の量により異なった声の表情を聴くことができます(茂手木 1998)。(檜下)

1-4-2a. オカリナ(上)

【使用国:ルーマニア(オルデア地方) 気鳴楽器】

1-4-2b. オカリナ(人形3人組)(下)

【使用国:ドイツ 気鳴楽器】

粘土や木で空洞を作り、吹口から吹く笛です。いくつかの指穴の操作で音階音を作ります。19世紀の末にイタリアで作られたとされますが、原形はもっと古いものと考えられています。古代中国には「埙」(けん)という卵形で陶製の楽器が見られ、同様の笛は日本の佐渡、信州でも埴輪として出土しているといえます(茂手木 1998)。京都府であれば、京丹後市の扇谷遺跡のものがよく知られています。卵状の楽器は弥生時代のものが日本海側で出土するようです(全国子ども考古学教室 web サイト)。(檜下)



1-5. 電鳴楽器

電鳴楽器は電気によって音を鳴らす楽器、という意味です。ザックス(1966[1940])は「電気増幅楽器」と「電気発振楽器」に大別しています。電気増幅楽器は普通の機構によって出された音や振動を「電気振動」に変えてそれをアンプで増幅させて音とするもので、例えばエレキギターはその代表的なものでしょう。電気発振楽器は電気発振回路の仕組みを使って、音の大きさや高さ、音色などを操作しつつそれをアンプから音として出力するものです。シンセサイザーや電子キーボードなどがこれにあたります。(檜下)



1-5-1. 小型電子キーボード

【使用国:日本 電鳴楽器】

第2部 近代日本の教育用楽器

現在の日本の音楽教育は世界でも類を見ないほど器楽教育（楽器を用いた教育）が充実しています。その充実ぶりは全国の小中学校の音楽室に用意された多種多様な楽器を見れば一目瞭然でしょう。第2部では、近代日本の音楽教育の歴史をたどりながら、様々な教育用楽器を紹介します。（檜下）

2-1. 教師が演奏する伴奏用楽器

1879(明治12)年、文部省に音楽取調掛が設置され、日本における西洋音楽の研究と近代学校における音楽教育の実施に向けた準備が本格化しました。このころ音楽取調掛に輸入されたのはアメリカ製のスクエアピアノ 10 台であったといえます。唱歌教育に最適な楽器はリードオルガンとピアノでしたが、それらは輸入に依存せざるを得ず、非常に高価でした。このため音楽取調掛は「日本在来の楽器を教育用として改良すること」と「リードオルガンとヴァイオリンを模造すること」に取り組んだといえます(井上 2020)。

最初に国産オルガンの量産化に成功したのは、横浜の外国人居留地の楽器商から手ほどきを受けた元三味線職人の西川虎吉でした。続いて 1887 (明治 20) 年ごろ、医療器械師兼時計師であった山葉寅楠が浜松の小学校の輸入オルガンの修理を依頼され、これを機にオルガン製造業に転じたのでした。のちに彼が起こすのが今や世界的な楽器メーカーとなったヤマハ(株式会社設立当時の名称は日本楽器製造株式会社、1987 年にヤマハ株式会社に変更)です。このヤマハが 1900(明治 33)年に製造したピアノが国産ピアノの第1号とされています(井上 2020)。

日本の学校教育の現場では戦前戦後を通してオルガンが唱歌の伴奏用として広く普及しました。高価なピアノは戦後の 1950 年代半ばごろには各学校に1台が普及したともいわれ、今やどの学校の音楽室でもその姿を見ることができます。（檜下）

2-1-1. 足踏み式オルガン

【使用国：日本 気鳴楽器】



京都府師範学校で実際に使われていた「足踏み式オルガン第19号」です。師範学校から後身の京都学芸大学には20台のオルガンが引き継がれましたが、そのうちのひとつと考えられています。製造番号(85740)から1909(明治42)年、日本楽器製造株式会社(現、ヤマハ)によって製造されたことがわかります。

足踏み式の「ペダル」で内蔵された高音部・低音部各4列の「笛」(管)に空気を送り込み、61鍵からなる「手鍵盤」を押すことで音が鳴る仕組みです。また、13個ある「ストップ」によって音色を調整することができます。当時の最高級品で、価格は350円。2023年の米価格を基準に換算すると、106万円程度に相当します。(中村)



2-1-2. 戦前のピアノを用いた唱歌教育の様子 ：京都府師範学校音楽室の写真

戦前の音楽教育は歌唱活動が中心とされたため、伴奏楽器の習得は初等学校教員には必須とされました。師範学校の教育内容を定めた「師範学校教授要目」でも、「おるがん」もしくは「びあの」の使用法が重要視されています。この写真は、1923(大正 12)年の京都師範学校第一部の卒業アルバムに掲載されたものですが、全国各地の師範学校にピアノが本格的に普及したのは、価格が低下した 1930 年頃からとされています(鈴木 2009)。京都府師範学校が全国に先がけて…とはいえないにせよ、かなり早期に導入していたことが知られます。あるいはこの写真は最新の楽器を誇って撮られた一枚かもしれません。(中村)

2-2. 子どもが演奏する教育用楽器

ここでは器楽教育の歴史に沿って、展示品の紹介をしていきましょう。

小学校において器楽教育が試行され始めたのは 1920 年代～30 年代(大正期～昭和初期)ごろのことです。教育用楽器の歴史における最初期に学校で「個人所有の楽器」として扱われたのがハーモニカでした(2-2-1)。ハーモニカは、大正期には玩具として所有している子どもが珍しくなく、例えば奈良女子高等師範学校附属小学校(現・奈良女子大学附属小学校)などでは、当初はまだ珍しかった児童作曲の指導の際に、作った曲を音に出して確かめるために子どもに「学用品」として持参させました。

1930 年代以降、少しずつ各地で試行されるようになった器楽教育においてもハーモニカはよく使用され、戦後の 1970 年代ごろまでは個人所有の楽器の定番でした。学校で使われるようになった頃から、口をつけて演奏するハーモニカは衛生上の観点からも他の児童と共有するのは避けるべきであるとされ、ここに「個人所有の楽器」という考え方が定着することになります。(檜下)



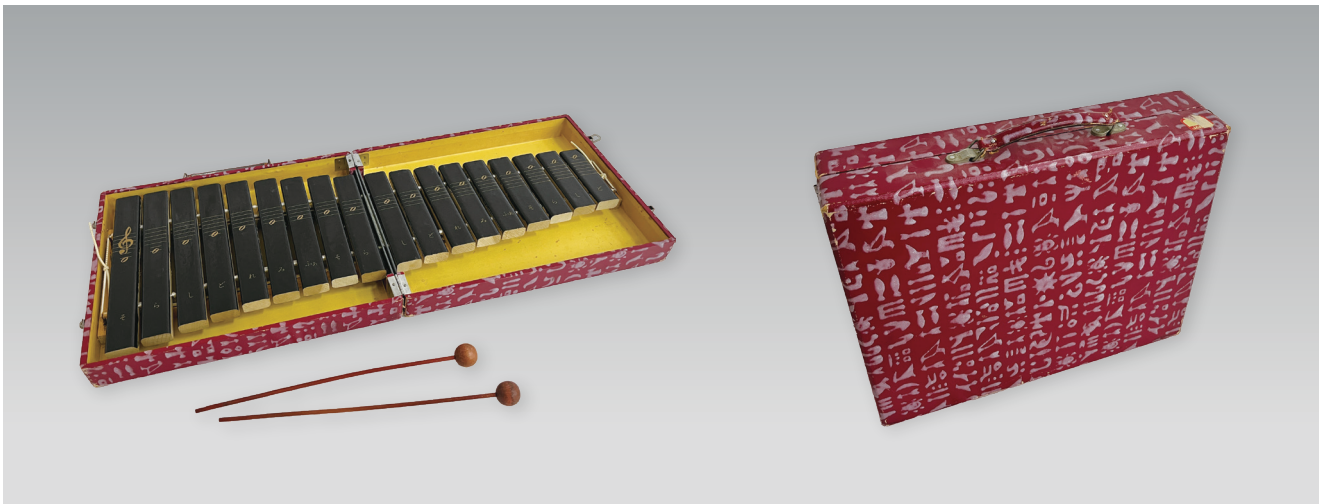
2-2-1. ハーモニカ 【使用国：日本 気鳴楽器】

戦前から戦後にかけての器楽教育でハーモニカと並んでよく使用されたのが木琴でした。今回展示する木琴二つはそれぞれ形状が異なります。年代は不明ですが、いずれもおそらく戦後のものと思われます。一つは木琴そのものが半分に分れて閉じると箱になり、持ち運びが簡易にできるようになっています(2-2-2a)。もう一つは音板を外して共鳴箱(本体)に入れ、その箱を閉じて持ち運びができます(2-2-2b)。このことから、これらは携帯用の教育用木琴であると推測でき、これも個人所有のものであったと考えられます。(檜下)

2-2-2a. 教育用木琴

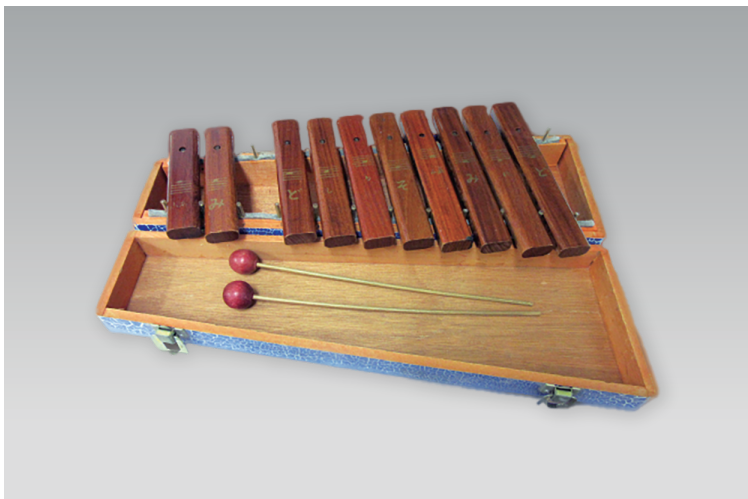
【使用国:日本 体鳴楽器】

※写真右側は収納した状態



2-2-2b. 教育用木琴

【使用国:日本 体鳴楽器】



戦後、ハーモニカとともによく用いられたのがアコーディオンです(2-2-3)。ハーモニカとアコーディオンはともにリード楽器(リードによって音を出す楽器)であることから、1950年代後半からこれらを組み合わせた「リード合奏」がよく行われました。今でも器楽合奏でアコーディオンを使う小学校は少なくありません。(檜下)



2-2-3. アコーディオン

【使用国:日本 気鳴楽器】

鍵盤ハーモニカはその名の通りハーモニカに鍵盤がつけられた楽器です(2-2-4a)。1960年ごろ、ヨーロッパで普及しつつあった有鍵ハーモニカが日本にも紹介され、国内の楽器メーカー各社はこれを参考に廉価な国産鍵盤ハーモニカを開発しました。1960年代を通じて徐々に学校現場に浸透していき、やがて個人所有の楽器の定番の座をハーモニカから奪うこととなります(南川 2023)。吹く穴と吸う穴があるハーモニカに比べて音が出しやすく、鍵盤で操作するため目と手で音を確認しながら演奏できるのが特長です。

当館の収蔵品のなかでも目を引くのは OHP 用透明鍵盤ハーモニカ(2-2-4b)です。OHP は影絵の要領でセロファンなどに書いた文字や絵をスクリーンに投影する装置で、かつて日本の学校教育現場でよく用いられていた視聴覚機器です。この楽器を OHP の上に載せて教師が演奏すると、鍵盤と教師の手指が影として教室前方に投影され、子どもたちはそれを見ながら教師の運指を真似ることができるというわけです。「教育」という営みから求められる機能が「楽器」に付与された、興味深い一例と言えるでしょう。(檜下)



2-2-4a. 鍵盤ハーモニカ

【使用国:日本 気鳴楽器】



2-2-4b. OHP用透明鍵盤ハーモニカ

【使用国:日本 気鳴楽器】

当館の収蔵する教育用楽器でもう一つ面白いのはスリットドラム(2-2-5)でしょう。木製の箱の蓋にあたる部分に切れ目を入れてできた様々な長さの板状の部分をマレットで打つと、軽やかな音色の様々な音高が響く楽器です。1970年代末の雑誌『教育音楽』の記事において、低学年のリズム指導で「楽しく学習できるリズム楽器」の一つとして紹介されています。「あるメーカーから発売されている変わり種のドラム」で「熱帯の原住民の楽器からヒントを得て開発したというだけあって素朴で快い響きがある」などと紹介されています(山田 1979)。(檜下)



2-2-5. スリットドラム SLD300

【使用国:日本 体鳴楽器】

一方、戦後急激に個人所有の教育用楽器としての地位を高めていくのがリコーダーです。リコーダーも息を吹き込めば音が鳴るため、フルートのような横笛に比べると子どもたちには負担の少ない楽器です。戦前に木製のものが日本に紹介されて、これをプラスチック製のものにして量産化したのはやはり国内楽器メーカーでした。(檜下)



2-2-6. リコーダー各種

【使用国ドイツほか 気鳴楽器】

現在の学校教育現場には日本音楽の指導も広がり、これに伴ってプラスチック製の篠笛や能管など、日本の伝統楽器もプラスチック製のものが学校現場に浸透しつつあります(2-2-7 および 2-2-8)。(檜下)



2-2-7. プラスチック製の篠笛(写真上)

【使用国:日本 気鳴楽器】

2-2-8. プラスチック製の能管(写真下)

【使用国:日本 気鳴楽器】

第3部 世界の教育用楽器

3-1. 韓国の学校教育と楽器

韓国は日本の隣国ということもあり、音楽教育にはいくつも共通点が見られます。リコーダーや鍵盤ハーモニカ、鉄琴などを用いた器楽教育が普及している点もその一つです。しかし、一方で、日本以上に自国の、あるいは自民族の音楽を意識した教育が行われている点に特徴があります。(檜下)



3-1-1a. ソゴ(小鼓)(上)

【使用国:韓国 膜鳴楽器】

3-1-1b. 教育用ソゴ(下)

【使用国:韓国 膜鳴楽器】

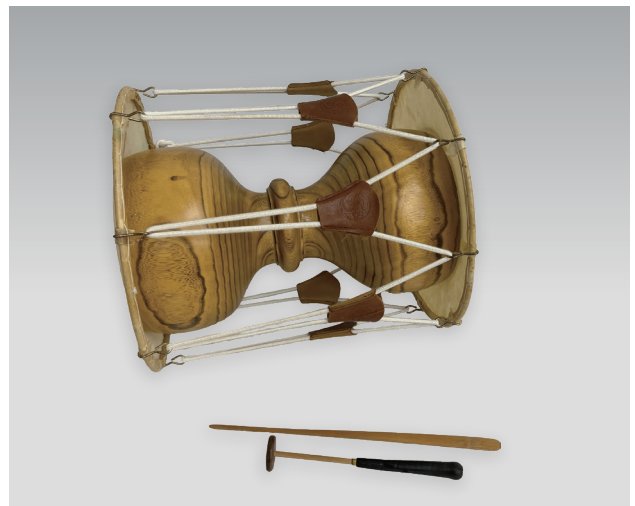


ソゴ(小鼓)は手持ちの太鼓で、左手で太鼓の取っ手を持ち、右手の棒で打ちます。朝鮮半島の民俗芸能で、農民の間で伝わる踊りの音楽「農楽」で主に用いられます(守重 2015)。本展ではその教育用版も並べて展示します。教育用楽器となったソゴは、持ち手の先の蓋が外れ、そこからバチを出し入れできる構造になっています。黄色いカバーに入れると学習用機の横にかけておくことができます。韓国の小学校低学年の教室では、子どもたちの机の横に、この黄色いカバーに入ったソゴがかけられている様子を見ることができます。(檜下)

3-1-2. チャンゴ

【使用国:韓国 膜鳴楽器】

チャンゴ(杖鼓)は、朝鮮半島の宮廷音楽や農楽をはじめ広く使われる打楽器です。奏者から見て右側の鼓面は細長い竹製のバチで打ち、反対側の面は先端の丸いバチか手のひらで打ちます。左右の鼓面で鳴らすそれぞれのリズムを組み合わせて多様なリズム型を演奏します(守重 2015)。韓国では自民族の伝統音楽教育を重視しており、プロの演奏家が子どもたちにチャンゴを教えるくるプログラムも実施されています。(檜下)



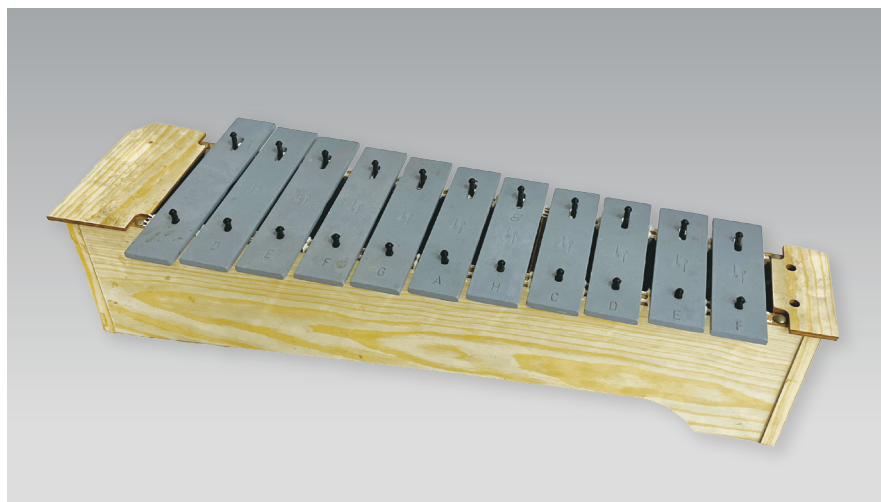
3-2. ドイツ、オルフの教育用楽器

カール・オルフ(Carl Orff,1895-1982)はドイツの作曲家であり、〈オルフ・シュールヴェルク〉と呼ばれる音楽教育メソッドを通して音楽教育家としても国際的な影響を与えた人物です。オルフ楽器は彼の音楽教育のための教育用楽器として世界的によく知られています。(檜下)



3-2-1. オルフ木琴

【使用国:ドイツほか 体鳴楽器】



3-2-2. オルフ鉄琴

【使用国:ドイツほか 体鳴楽器】



【コラム】 c . オルフの音楽教育と楽器

檜下 達也（京都教育大学音楽科 教員）

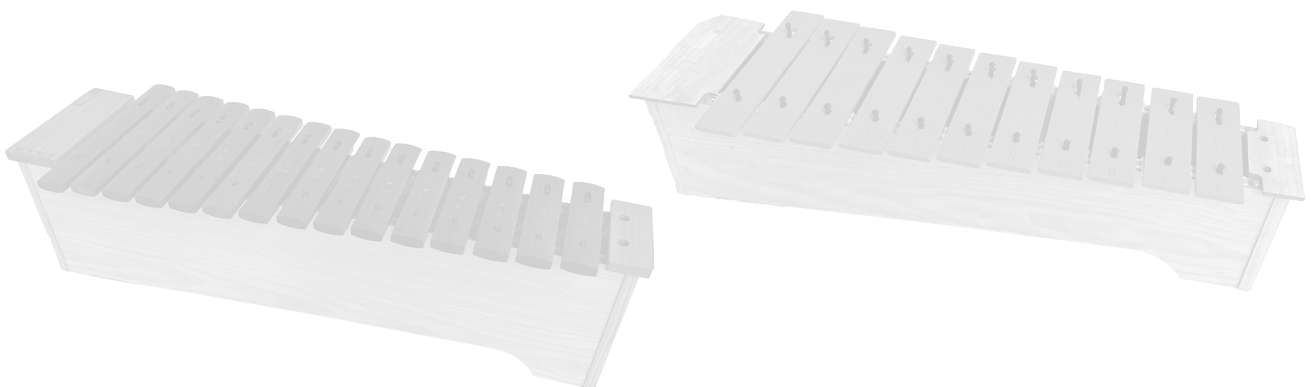


オルフの音楽教育の理念と方法は、1950 年代に出版された『オルフ・シュールヴェルク：子どものための音楽』という 5 巻からなる教育用作品に加え、青少年のための作品や器楽演奏のための作品などにも反映されているとされ、一般的にはそれらを総称して〈オルフ・シュールヴェルク〉と呼びます。オルフの音楽教育の特徴は次の 8 点だといわれています（藤井 2004）。(1) 子どもの遊びを出発点とする音楽教育、(2) 母国語を基盤とするリズム練習の重視、(3) 音階の系統性の重視、(4) 中世音楽に見られる音楽技法による作曲、(5) 子どもが演奏する楽器の精選、(6) 〈言葉〉〈動き〉〈音楽〉の合一、(7) 即興を中心とする音楽活動、(8) アンサンブル主体の演奏形態。

オルフの音楽教育で用いられる楽器には、リコーダー、木琴、鉄琴、小ティンパニなどが挙げられますが、それらオルフ楽器の中でも最も特徴的とされ有名なものが、木琴や鉄琴のような音板打楽器です。オルフ楽器の音板打楽器は、その音板を自由に取り外すことができる点に特徴があります。この特徴により、オルフの音楽教育が重視する「(3) 音階の系統性」を意識しながら、「(7) 即興を中心とする音楽活動」を実現するのです。例えば「ドレミファソラシ」の 7 音から四つの音板を取り外して「ミ」と「ソ」と「ラ」の音板だけにし、この 3 音に合う伴奏をつけて子どもたちに即興演奏をさせます。演奏されるべき音だけがそこにあるため、低年齢の子どもたちでも遊びの延長として楽しく容易に即興演奏を経験できるというわけです。年齢や学習段階に応じて「ドミソラ」(4 音)→「ドレミソラ」(5 音)のように音階の構成音を増やし、最終的に西洋の長音階「ドレミファソラシ」へと導いていくことができます。

こうした教育上のねらいを実現する構造的特徴のみならず、音の美しさもオルフ楽器の優れた点です。優しく愛らしい木琴の音色と、真っ直ぐに余韻が伸びる鉄琴に、リコーダーの素朴な音色が合わさるアンサンブルは、簡易ながらも十分に芸術的な雰囲気をもたらし、子どもたちに芸術としての質の高い音楽経験をもたらすのです。

オルフの教育理念や思想とともに、オルフ楽器は日本にも紹介され、1960 年代には「オルフ・ブーム」を巻き起こしました。現在も日本中の小学校の音楽室にオルフ木琴の姿を見ることができますが、今、オルフの教育理念を理解しながらこの楽器を授業で活用できる先生数は随分と少なくなっていると思われます。オルフ楽器に限らず、どんな教育用楽器であっても、その背景には「子どもたちにどんな音楽経験をさせたいのか」という理念があるはずです。私たち大人は、子どもたちのためにどんな楽器を選ぶのかを考えると、その楽器を通して子どもたちがどんな音楽経験をするのか、立ち止まって考える必要があるのかもしれません。



3-3. フランス、バシェの教育用音具

「パレット・ソノール」は、フランスのバシェ兄弟によって考案された音響彫刻の一種です。1970 年、大阪万博の鉄鋼館で展示された大型の音響彫刻は、特殊な形状による複数の部品で構成されています。これらは彫刻としての機能もさることながら、予想できないような音を響かせる役割も持っています。このような音響彫刻の教育版として位置付けられているパレット・ソノールは、異なる形状を持つ 14 種の総称であり、それぞれの個体にはユニークな名前がつけられています。音響彫刻に見られる形状の一部や、金属やガラスなどの素材を共有しつつも、ひとつひとつは小型に設計されているため、より親しみやすく、触れやすくなっています。打楽器の撥以外に、たとえば手で撫でたり擦ったり、はじいたりしてもよく響くよう構造が工夫されています。眼や耳、手のさまざまな感覚を味わいながら複合的に楽しむことができるのが、音響彫刻の魅力と言えます。(増田)

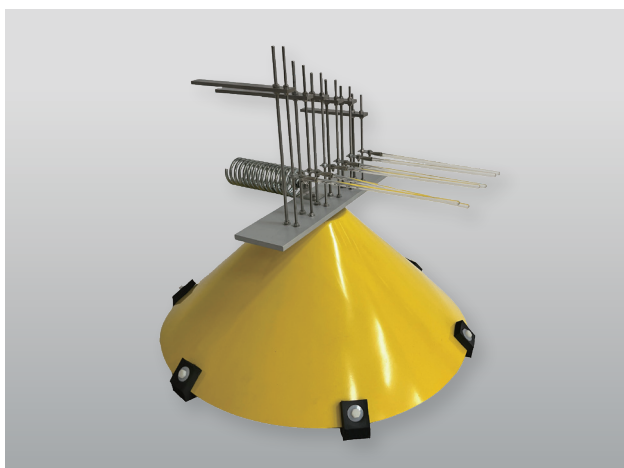
3-3-1. バシェの教育用音具パレット・ソノール14台
【製造国：フランス】



3-3-2. アーク(バシェの教育用音具)
【製造国：フランス 弦鳴楽器】

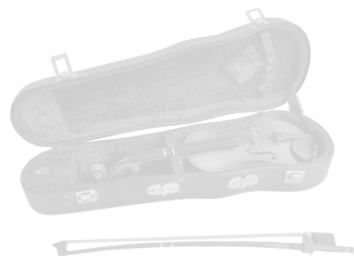


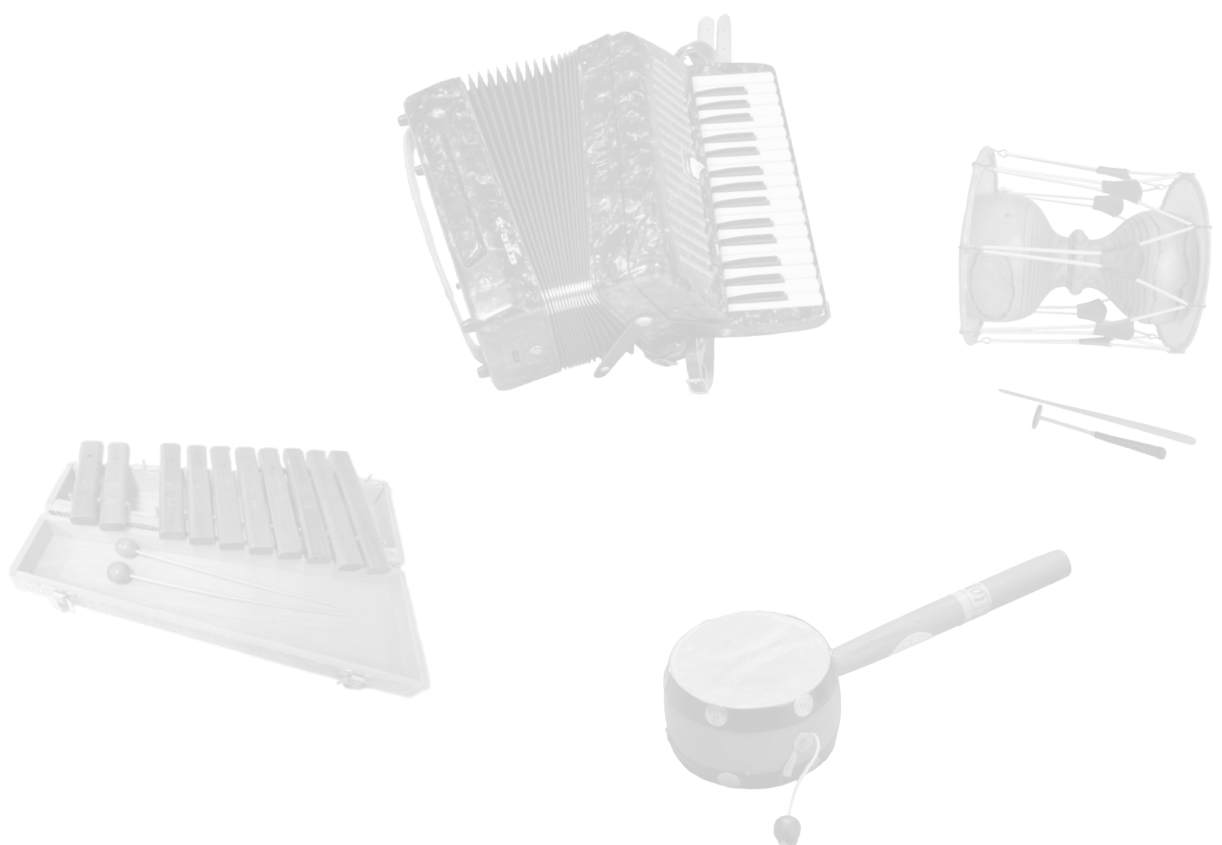
3-3-3. クリスタル(バシェの教育用音具)
【製造国：フランス 体鳴楽器】



主要参考文献

- ・ザックス ,C、柿木吾郎(訳)(1966)『楽器の歴史(下)』全音楽譜出版社。(Sachs,C. (1940). *The History of Musical Instruments*. W W Norton & Co Inc.)
- ・ヴァンターニッツ ,E、皆川達夫・磯山雅(訳)(1977)『楽器の歴史』PARCO 出版。
- ・ブラッキング ,J、徳丸吉彦(訳)(1978)『人間の音楽性』岩波書店。(Blacking,J.(1973). *How Musical Is Man?*,the University of Washington Press.)
- ・山田宏(1979)「低学年のリズム指導ちょっとした工夫とアドバイス 楽しく学習できるリズム楽器」『教育音楽 小学版』第 34 巻第 12 号、pp.64-65。
- ・網代景介・岡田知之(1981)『打楽器辞典』音楽之友社。
- ・茂手木潔子ほか(1998)『おもちゃが奏でる日本の音』音楽之友社。
- ・柘植元一・塚田健一(1999)『はじめての世界音楽：諸民族の伝統音楽からポップスまで』音楽之友社。
- ・若林忠宏監修(2003)『国際理解に役立つ世界の民族音楽④：アラブとアフリカの音楽』ポプラ社。
- ・藤井康之(2004)「オルフの音楽教育：【定義】」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、p.98。
- ・鈴木慎一郎(2009)「師範学校における楽器環境―教員・保育者養成の源を探って―」『白梅学園大学短期大学教育・福祉研究センター研究年報』14 号。
- ・守重信郎(2015)『楽器学入門：写真でわかる！楽器の歴史』時事通信出版局。
- ・黒澤隆朝(2019)『図解 世界楽器大辞典(第六版)』雄山閣。
- ・南川朱生(2023)『鍵盤ハーモニカの本』春秋社。
- ・井上さつき(2020)『ピアノの近代史：技術革新、世界市場、日本の発展』中央公論社。
- ・特定非営利活動法人むきばんだ応援団 web サイト「全国子ども考古学教室」(2024 年9月閲覧)。





展示目録

展示番号	資料名	使用国、楽器分類 など	所蔵
1. 玩具的楽器と楽器分類			
1-1. 体鳴楽器			
1-1-1.	チリンバ(カリンバ)	【使用国:タンザニア 体鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-1-2a.	ぼっぺん	【使用国:日本(長崎県) 体鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-1-2b.	ぼっぺん	【使用国:日本 体鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-1-3.	雨団扇	【使用国:日本 体鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-1-4.	カウベル	【使用国:ブルガリア 体鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-2. 膜鳴楽器			
1-2-1.	でんでん太鼓	【使用国:日本 膜鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-2-2.	ダマル	【使用国:インド 膜鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-3. 弦鳴楽器			
1-3-1.	ゴピチョンド	【使用国:東インド 弦鳴楽器、膜鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-3-2a.	ぶんぶんぜみ	【使用国:日本 弦鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-3-2b.	マンドウック	【使用国:インド 弦鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-3-3.	ヴァイオリン(1/16サイズ)	【製造国:日本 弦鳴楽器】	個人蔵
1-4. 気鳴楽器			
1-4-1a.	鳥笛	【使用国:中国 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-4-1b.	水笛	【使用国:不明 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-4-2a.	オカリナ	【使用国:ルーマニア(オルデア地方) 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-4-2b.	オカリナ(人形3人組)	【使用国:ドイツ 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
1-5. 電鳴楽器			
1-5-1.	小型電子キーボード	【使用国:日本 電鳴楽器】	京都教育大学音楽科
2. 近代日本の教育用楽器			
2-1. 教師が演奏する伴奏用楽器			
2-1-1.	足踏み式オルガン	【写真展示、使用国:日本 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
2-1-2.	戦前のピアノを用いた唱歌教育の様子	【写真展示、京都府師範学校音楽室の写真】	京都教育大学教育資料館
2-2. 子どもが演奏する教育用楽器			
2-2-1.	ハーモニカ	【使用国:日本 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
2-2-2a.	教育用木琴	【使用国:日本 体鳴楽器】	個人蔵
2-2-2b.	教育用木琴	【使用国:日本 体鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
2-2-3.	アコーディオン	【使用国:日本 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
2-2-4a.	鍵盤ハーモニカ	【使用国:日本 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
2-2-4b.	OHP用透明鍵盤ハーモニカ	【使用国:日本 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
2-2-5.	スリットドラム SLD300	【使用国:日本 体鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
2-2-6.	リコーダー各種	【使用国:ドイツほか 気鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
2-2-7.	プラスチック製の篠笛	【使用国:日本 気鳴楽器】	個人蔵
2-2-8.	プラスチック製の能管	【使用国:日本 気鳴楽器】	個人蔵
3. 世界の教育用楽器			
3-1. 韓国の学校教育と楽器			
3-1-1a.	ソゴ(小鼓)	【使用国:韓国 膜鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
3-1-1b.	教育用ソゴ	【使用国:韓国 膜鳴楽器】	個人蔵
3-1-2.	チャンゴ	【使用国:韓国 膜鳴楽器】	京都教育大学音楽科
3-2. ドイツ、オルフの教育用楽器			
3-2-1.	オルフ木琴	【使用国:ドイツほか 体鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
3-2-2.	オルフ鉄琴	【使用国:ドイツほか 体鳴楽器】	京都教育大学教育資料館
3-3. フランス、バシェの教育用音具			
3-3-1.	バシェの教育用音具パレット・ソノール14台	【写真展示、製造国:フランス】	京都教育大学音楽科
3-3-2.	アーク(バシェの教育用音具)	【製造国:フランス 弦鳴楽器】	京都教育大学音楽科
3-3-3.	クリスタル(バシェの教育用音具)	【製造国:フランス 体鳴楽器】	京都教育大学音楽科



第6回 教育展 楽器の世界 -子どもと音楽をつなぐ楽器展-

発行日 令和6年11月1日
編集・発行 京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム
〒612-8522
京都市伏見区深草藤森町1番地
TEL 075-644-8537
<https://www.kyokyo-u.ac.jp/museum/>
デザイン・印刷 エスフラックスKyoDoデザインスタジオ